

## 学位論文要旨

An Instructional Design to Improve English Pronunciation for Japanese University Students  
(日本人大学生のための英語発音指導デザイン)

中條純子

## Abstract

This dissertation aimed to develop a method of *instructional design* (ID) to help Japanese university learners of English attain the basics of internationally comprehensible English pronunciation and become active communicators in English while also fostering their *affective variables*, namely *confidence*, *attitude*, and *awareness* toward English pronunciation. These goals are achieved by designing and testing coursebook activities intended to lower psychological barriers to English pronunciation learning for Japanese university students. The design, development, and evaluation of the coursebook were conducted through a literature review and analysis based on student needs. The materials were subjected to formative and summative evaluation at different stages of the process to determine what benefits this pedagogical practice had. The finalized coursebook utilized for the summative evaluation was *Now I Got It! Fun Guide to English Pronunciation* along with 136 sound and video files. It presents a semester-long instruction design packaged with material tailored to Japanese university learners. It features rhythmic and monitoring activities with self-video recording to foster learners' affective variables during pronunciation instruction. The findings derived from the development process and evaluation will also provide useful lessons even on their own, separate from the utility of the developed materials.

## 1. 目的

本論文では、日本人大学生の英語音声向上を目的としたインストラクショナルデザイン（教育指導設計）を提起した。大学の授業に導入できる教材群を開発し、その開発過程から得られる知見を英語の授業改善に応用することで、日本人学生の口頭コミュニケーション能力の向上に資することを目的としている。

インストラクショナルデザインは、方法論的には、分析・設計・開発・実施・評価という5段階の基本プロセスから成るシステム・アプローチに立脚している。本論で取り組むインストラクショナルデザインの主な目的は、実践的な問題解決にある。すなわち、現存する様々な教授法の有効性を理論的に分析することよりも、自らの教育実践による経験の中で省察の結果として得られた解明すべき問題を理論と実践を往復しつつ解きほぐしていくことを目的としている。

本研究では、デザイン実験アプローチという研究方法を選択した。これは、統制群を設定し、その対比において教育の効果を確認する方法ではなく、処方的含意を持つ開発教材を授業に導入し、そこに生起する事象を分析しながら理論を構築していく方法である。

本研究では実際に3大学の授業をフィールドとして、400名以上にわたり実験的な授業実践を行った。授業の流れの中で、自らの省察をベースとしつつ、観察やデータ収集を行い、その結果を分析し、

教材や指導方法を調整改良するというプロセスを繰り返した。デザインした授業が効率的、効果的、機能的、魅力的になるよう高めることが目的である。

この研究アプローチでは、教室内で起きる様々な事象や学習者心理など多様な要因がからみあっていることもあり、実証的かつ統計的に厳密にその要因の相互関係を特定することは難しい。しかし、教育的で意図的な働きかけの有効性は学生の到達度を評価することによって確認できる。これがこの研究アプローチの特色である。

インストラクショナルデザインにおいて、重要なプロセスの1つは、学習目標を明確に設定することである。設定目標に対して効果的、効率的にインストラクションを行うために学習目標を知識面・技能面・情意面という3領域において設定した。具体的には、本研究において次の3点を学習目標とした。

- 1) 英語の発音構造や調音の基礎知識を得ることができること（知識面）。
- 2) コミュニケーションを阻害する可能性の高い音を発音できるようになること（技能面）。
- 3) 英語の発音に対する意識を高め、自信をつけること（情意面）。

そして、それぞれの項目において、学生たちの指導前のレベルから目標を達成するレベルへの差を埋めることを教授目標とした。効果的、効率的、機能的、魅力的に到達させるため、授業実践を重ね、観察分析し、形成的評価を行い、教材を設計開発した。

## 2. 開発教材

最終開発教材は、次の3部構成である。

1. コースブック（教科書）*Now I Got It!*（A4、176ページ）；
2. 活動用音声ファイルと発音モデル動画ファイル  
（授業内使用及び自主学習用含め総計136ファイル、専用HPよりダウンロード可）；
3. 教授資料（解答、スクリプト解説集）。

コースブックは、本編（12 Units）と巻末（課題：11 Units、切り離し式）から成る。新しく導入された音素の調音が適切かどうかを授業内で自己モニターできるよう、テキストの裏表紙に、紙製の鏡（3×5 cm）を添付した。

音声と動画モデルの教材作成はアメリカ標準英語を基本として行なった。しかし、現実の英語コミュニケーション状況も考慮し、教育の場ではあまり取り上げられない英語音声も教材の中に取り込んでいく。

授業の中で学生たちが意図的・目的的に習得すべき音声要素は精選した。例えば、音素については、学生がその音素をマスターすれば英語音声コミュニケーションの阻害要因が減少するような音素を厳選して教材化した。明示的指導を意図した教材は、16子音、ストレス、リズム、イントネーション、7母音（二重母音を含む）から構成される。教材では、目標音を「音素」レベルから「単語」、「文」、「会話」へと段階的に練習できるよう配列した。そして、発音についての気づきと理解が深まるよう、コースブック本編の中盤で英語の発音の要点を解説した。さらに、学生自身が発音をモニターし修正できるようになっているかを知識と技術の両面で確認する復習ユニットも配列した。

教材は、学生たちが定着のための反復練習を、興味を持ってできるよう、学習不安軽減の効果があるとされる早口言葉やチャンツ等のリズムをベースとした教材を多く取り入れた。

可能な限り機械的な練習を避け、ストーリーの自然な展開の中に現れるように教材構成の工夫をした。主教材はストーリー仕立てとした。日本人女子大学生がアメリカを初めて訪ね、そこで世界から集まる同世代の人々と出会い、英語を共通語として交流を深めるというストーリーである。毎回の授業が近未来のリハーサルであるという気持ちで取り組んでもらうためである。学生が英語音声を着実に身につけられると共に、その技能を授業の枠を超えて発展的に活用できるような教材を目指した。

最終的に開発教材で採用した指導方法は、指導者の懇切丁寧な指導により学生の英語発音を改善するような方法ではない。本研究においては、学生自身が自分の発音をモニターし、自分の発音を評価し、修正していくプロセスを重視した。30～40人規模の一斉授業においても、学生が自分で発音をモニター

しながら正確で安定した発音を身に着けることができる活動を組織すれば、大きな成果が上がるはずである。モニターの重要性や英語発音指導に関しては文献で活発に論じられている。しかし、コースブックにこのようなモニター活動が盛り込まれているものは、日本の現状においては、確認できない。

### 3. リサーチクエスチョン、検証方法、結果

開発した教材の総括評価は、5つのリサーチクエスチョンを設定し行った。日本の大学1年生、2クラス計60名にこの教材を実験的に導入した。設定した学習目標を学生が達成したかどうか、それがこの発音インストラクショナルデザインの評価となる。評価結果を得るための検証は前述した3領域の学習目標に即して以下の3項目において行った。加えて、本論では効果の認められる教材の開発に加え、発音指導の定式化につながる知見を追求することも目的としている。どのような活動が日本人大学生にとって適した音声学習活動であるのかを2項目において検証した。

1. 一斉授業において、開発教材による発音指導は日本人大学生の分節音（子音）の調音知識を有意に増大させるか。（指導対象音内の10子音：/l/, /r/, /w/, /f/, /v/, /θ/, /ð/, /s/, /z/, /ʃ/）

筆記考査による到達度の評価（知識面）

評価対象音10音の明示的導入の完了時より7週間後に予告なしに試験形式で実施した。試験は、母音と子音計17音の調音法（例：「上の前歯に下唇を軽くあてます。上の前歯と下唇の間から、息をしっかりと吹き込みます。声帯は使用しません。」）が選択肢としてランダムに日本語で記載されているリストより、評価対象音10音の調音法を選択し、記号で回答するという形式であった。1問1点として集計した。開発教材を用いていないグループにも同様の試験を実施した。その結果は、本教材を用いた授業を行うことによって調音の知識が向上したことを示していた。

2. 一斉授業において、開発教材による発音指導は日本人大学生の分節音（子音）の調音技能を有意に向上させるか。（指導対象音内の10子音：/l/, /r/, /w/, /f/, /v/, /θ/, /ð/, /s/, /z/, /ʃ/）

英語母語話者2名の聞き分け判定による到達度の評価（技能面）

授業活動の一環として学生が自身の発音を録画した音声資料を用いた。指定した原稿を読み上げる形式で、事前練習可能な条件での録画であった。授業開始前（事前）の発音と終了後（事後）の発音を比較した。評価対象音は、2種類の音環境で発音した10子音であった。ひとつは、対象子音+/a/（例：ra）、もうひとつは、単語の語頭に評価対象子音があった（例：right）。事前に改善の必要がないと判断されていた音が事後に悪化していた音を「悪化音」、事前に改善の必要がないと判断されていた音が事後にも改善の必要がないと判断されていた音を「未変化音」、事前に改善の必要のある音と判断されていたが、事後に改善が認められなかった場合を「未改善音」とし、事前に改善の必要のあると判断されていた音が事後に改善していた場合を「改善音」と定義した。のべ93名、1860音をアメリカ英語母語話者2名が評価した。その結果は、本教材を用いた授業を行うことによって調音の技能が向上したことを示していた。

3. 一斉授業において、開発教材による発音指導は日本の大学生の情意領域、特に、発音に対する自信や意識を有意に増大させるか。

アンケート調査による到達度の評価（情意面）

発音に対する「意識」と「自信」を学生が5段階のリッカートスケール法により自己評価した。評価は教材導入前と導入後において行った。その結果の平均値を算出し、対応のあるt検定により有意差の有無を判定した。その結果は、本教材を用いた授業を行うことによって発音に対する態度が向上したことを示していた。前述した条件内において開発教材を導入した指導の効果が認められたと評価できる。

4. 一斉授業において、日本人大学生は、学習不安軽減の効果があるとされるチャンツや早口言葉の活動をどのように評価するか。

#### アンケート調査による活動の評価

授業で導入したテキスト内の主な16の活動に対し、学生がその活動をどのような思いで取り組んでいたのかを調査した。調査は、1. 発音の向上に役立った活動；2. 興味を持って楽しく取り組めた活動の2項目であった。1活動、1点として集計し、ランキングを算出した。その結果は、英語活動の不安を軽減する活動として導入した「チャンツ」、「早口言葉」を学生は、「1. 発音の向上に役立った活動」のランキングのそれぞれ1位と2位、「2. 興味を持って楽しく取り組めた活動」のそれぞれ5位と6位という評価であった。日本人大学生用の英語発音指導テキストには、通常、導入されていない活動であるが、日本人大学生の情意面における発音指導に効果のある活動であると認められたと評価できる。

5. 一斉授業において、日本人大学生は、現在日本の大学の英語発音教科書に活動として導入されていないどのような活動で教育的効果を得ることができるか。

#### アンケート調査による活動の評価

モニター活動導入の情意面における効果を検証した。比較はモニター活動導入前と導入後において行った。学生が5段階のリッカートスケール法により自身の発音に対する「興味」・「変化」・「通用性」・「意識」・「自信」の5項目において自己評価した。評価項目はその結果の平均値を算出し、対応のあるt検定により有意差の有無を判定した。その結果、発音に対する自己評価5項目のうち、「意識」・「通用性」・「変化」の3項目において、モニター活動の事前事後の平均値に有意な差が認められた。1度のモニター活動により学生の情意に変化が認められ、日本人大学生の情意面における発音指導にモニター活動の効果が認められたと評価できる。